

特集 森と街をつなぐ

森のパワーと、都市のエネルギーを循環させるには、人間のアイデア、経験が不可欠だ。山梨県小菅村在住の森の人・中田無双さんは、大企業の支援を受けて植林地の再生に取り組む。京都市在住の街の人・松田直子さんは、市街地でも木材を暖房の燃料に使えるペレットストーブの普及に尽力する。2人の活動を振り返るインタビューとともに、水源の里と都会をつなぐヒントを探し歩いてみた。

営業マン流・森の再生術

“ほうれんぼう”が 林業を変えた

【取材・文：荒牧公哉】

山梨県
小菅村
森編



小菅村はこんなまち

秩父多摩国立公園にある、山梨県北都留郡の山村。人口729人、面積52.6km²、標高530～2,000m。特産品のコンニャク、ソバ、ワサビ、キノコ類、養殖ヤマメ、養殖イワナなどは「小菅村物産館」などで購入可能。小菅村への交通は、JR青梅線奥多摩駅から西東京バスで約50分。マイカーの場合、中央道上野原ICから、国道20号→県道18号経由で約45分。

※小菅村物産館
日帰り入浴施設「多摩源流小菅の湯」併設（営業時間は4～10月が午前10時～午後7時、第4金曜日定休）。

大企業を味方に

山梨県小菅村の「ほうれんぼう」に会った。1ターンで静岡県沼津市から移住した北都留森林組合の参事・中田無双さん（47）は、「ほうれんぼう＝外遊び」に夢になる人を指すこの地の方言がよく似合う。ただし、中田さんの場合は遊びではなく、森の仕事に夢中なのだ。楽しそうに、嬉しそうに森の暮らしの魅力を語ってくれた。

森林組合は、植林された森の所有者の出資で成り立つ。中田さんの仕事は、所有者の森を、適切に管理することだ。エリアは、小菅村、北隣の丹波山村、南側の上野原市にまたがる。東京都の西端、奥多摩町に続く山々に囲まれる。その中央

の小菅村は、約52km²の小さな村で、面積の約95%を森林が占める。密植された杉などを間引く間伐ひとつとっても容易ではない。急峻な山肌の木々をどうやって運び出すか。どこに置くか。とにかく手間がかかる。

中田さん流の解決方法は、大企業にスポンサーになってもらうことだった。小菅村の森林管理には、本田技研（ホンダ）、日本たばこ産業（JT）、サントリーがバックについている。そのおかげで毎年3～4kmの新たな林道が整備され、間伐が進む。造林補助金では足りない林道整備の資金を、大企業の資金でまかっている。東京の大手書店、紀伊国屋書店の営業マンだった中田さんが、企業の社会貢献活

動（CSR）の担当者に営業をかけて獲得した、都会と森をつなぐパートナーシップである。企業側も、当初は「木を植える」活動に目を向けていたが、植林だけでなく、間伐の必要性を訴え続けた。その結果、現在の関係が醸成された。

「どの田舎にも、役者はそろっているんです。都会の人にとって価値のあるもの、まだスポットライトが当てられていないものがたくさんある。しかし、小菅村もそうですが、都会と田舎をつなぐ人が、地元にはいないのです。そこに、都会から来た、よそ者が力を発揮できる部分がある。これからも、村の良さを勉強して、村の素材すべてを都会の人と分かち合うため

森のキーパーソン

中田無双（なかだ・むそう）

昭和42年6月28日、東京都足立区竹ノ塚生まれ。日本大学国際関



88番が中田さん（中段左）

係学部卒。在学中はアメリカンフットボール部に所属、ポジションはタイトエンド。大手書店「紀伊国屋書店」の営業マン、文房

具店経営を経て、平成14年に小菅村に移住。北都留森林組合参事。家族は妻・雅子さんと一男一女（双子）。身長182センチ、体重90キロ超。



サラリーマン時代の中田さん



明るく整備された杉林